

「情熱をもって『生きる』」 ☆愛知県知事賞 3年4組 長沢 希
書名 牧野富太郎「日本植物学の父」

初めて牧野先生の植物図をみた。

それは本物のヤマザクラだった。いや、絵だというのは分かっている。けれど、柔らかな花弁と控えめなピンク色から確かに春の香りが感じられたのだ。ヤマザクラを形作る線の一本一本には、彼の植物への誠実な愛が宿っている。植物の小さな体の中に存在する精密な世界を描ききりたいという情熱が伝わってきた。

牧野先生の植物への愛は、ずっと変わらなかった。子どもの頃から野山へ通い、花との対話を続けていた。「植物には、目も鼻もないのにどうやって春の訪れを知るのだろうか。草花はそれぞれが自分だけの花や葉を持っているんだ！」好奇心に導かれ、幼少の彼はどこまでも冒険を続けた。私も小さな頃は毎日外に出て、草花に触れていた。今にも咲きそうな花のつぼみや面白い形の葉っぱに出会えるのが楽しくて、飽きずに見つめたものだ。だんだん自分の中に不思議の種がたまってくると、もっと詳しく知りたくなってくる。本で調べたり、近くの大人に聞いたり…。そうやって身に付けた知識が学ぶことの楽しさになり、今でも私の力になっている。

それにしてもどうして牧野先生の周りはいつにもぎやかだったのだろうか。植物の知識を高め合える友人や温かく応援してくれる家族、困ったときには必ず助けてくれる人がいて、大好きな植物の道が続けることができたなんて本当にうらやましい。美しいものに感動し、植物を大切にしていくなかで周りの人を思いやる気持ちも身に付けていた。感謝を忘れない心と真っ直ぐな植物への情熱があったからこそ彼はこんなにも多くの人に愛されていたのだと思う。

私は、この本の中でずっと心に残していきたい言葉に会えた。これは牧野先生がゆりの花へ送ったものだ。「思い疲れた夕など、窓辺にかかる一輪のゆりの花をじっと抱きしめてやりたいような思いにかられても、ゆりの花はだまっています。そしてちっとも変わらぬ清楚な姿で、ただじっとにっおっているのです。」

花は、何を思っているのだろうか。牧野先生を見守っていた花は、人間の営みの傍らで静かに咲いていた。特別な風景ではないのに、なぜか心惹かれてしまう。純粹な言葉から伝わってくる彼の心の豊かさに、私は感動した。人はものをもつことで豊かになろうとするけれど、それではきっと幸せにはなれない。晴れた日の青空や友だちと会える喜び、庭の草花に心をときめかせ、日々の小さな出来事を楽しむ豊かな心が人生を素敵なものにしてくれるのだと私は気付いた。

しかし、私たちはその小さな幸せを守り続けられるのだろうか。牧野先生の顔を思い浮かべながら考えてみる。子ども時代をすごした野山が住宅地にするために削られ、珍しい動植物を見に来る人たちが持ち込んだゴミや外来種のせいで本来の自然の美しさが失われてしまっている。声なき者たちの訴えを無視して自分たちの欲望のままに生きる人間の傲慢さを彼は悲しむだろう。

きっと私たちは分かっている。今のままでは、地球の将来が決して明るくないことを。けれど、自分の目の前の生活に追われ、何かが入り込む余地がないまま生きている。私は自分を振り返り、考えてみた。果たして自分の行動に責任をもっているのだろうか。情熱をもって生きているのだろうか。世の中にあふれる事件や情報をいくら知っていても、やはり自分のことのように思っていないで、日々の生活の中に消えてしまっていた。本当に広い視野をもっている人と私とで大きく違っているのは覚悟があるかどうかだ。牧野先生が言う覚悟とは広い社会を自分の足で歩くこと、つまり、目の前の課題に誰でもない「私」として立ち向かうことができるのかというものだ。覚悟をもつことで一つ一つの出来事を重要な経験に変えることができると思う。社会という大きな存在を目の前にして、私は何を目指して生きよう。私の未来にはたくさん道がある。けれど、どれが正しいかわからない。正しさが一つに定まらない世の中で自分を信じることは難しい。いや、夢や目標をもつことで、自分の力不足や理想との差がはっきりわかってしまうことを恐れて、多くの人と同じような道を選んでしまっているのかもしれない。自分の選択を信じ続けることは辛いだろう。しかし、牧野先生のように情熱をもって夢を追いかければ、きっと道は拓ける。同じ志をもつ友人にきっと出会える。人と関わりが減り、心の距離まで遠くなりそうな私たちは気分が沈みがちで、自分の人生を生きることに関心なくなっている。だからこそ、私は自分の生き方に情熱をもつことが必要だと思う。地に深い根を張り、凜と背筋を伸ばして生きる草花のように私も顔をあげて強くたくましく生きていきたい。